

審査の結果の要旨

氏名 財津 將嘉

本研究は、本邦において、膀胱がんの病理組織および予後について性差が存在するかどうかを明らかにするため、地域人口集団を対象とした神奈川県地域がん登録における膀胱がんの大規模データを用いて、膀胱がんの病理組織は女性の方が不良であることを明らかにし、さらに、この病理組織を調整しても膀胱がんの予後は女性の方が不良であることを明らかにすることを試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. 著者は、神奈川県に神奈川県地域がん登録のデータ利用の申請を行い、データを取得した。
2. 初発性膀胱がん 13,184 例を解析対象とし、病理組織を尿路上皮癌 (urothelial carcinoma, UC)、と非尿路上皮癌 (non-UC) に分けたところ、non-UC の割合は、女性は 8.2%で男性は 4.0%であった。年齢、診断時期で調整した男性に対する女性の non-UC のオッズ比 (95%信頼区間) は 2.14 (1.81-2.52) であった。この結果、女性の方が、予後不良である non-UC の割合が高いことが示された。
3. 生存時間の追跡が可能であった 10,712 例で生存時間分析を行ったところ、全体としての 5 年全生存率 (95%信頼区間) は、女性は 0.49 (0.47-0.51)、男性は 0.56 (0.54-0.57) であり、5 年がん特異的生存率は、女性は 0.59 (0.57-0.61)、男性は 0.71 (0.70-0.72) であった。コックス比例ハザードモデルにより、年齢、診断時期、病理組織で調整した男性に対する女性の全死亡およびがん特異的死亡のハザード比および 95%信頼区間を求めたところ、女性の全死亡およびがん特異的死亡のハザード比 (95%信頼区間) は、それぞれ 1.15 (1.06-1.23)、1.39 (1.28-1.52) であった。この結果、病理組織を調整しても女性の方が予後不良であることが示された。
4. 病理学的病期および悪性度についてデータの揃った 699 例 (男性 547 例、女性 152 例) について、生存時間分析を行ったところ、女性の全死亡およびがん特異的死亡のハザード比および 95%信頼区間は、それぞれ 1.52 (1.09-2.13)、および 1.71 (1.14-2.56) であり、病理学的病期および悪性度を追加調整しても、女性の方が予後不良であることが示された。

以上、本論文は、膀胱がんは、女性の方が病理組織も予後も不良であることを明らかにした。本研究は、これまで未知に等しかった、本邦での膀胱がんの病理組織および予後の性差の解明に重要な貢献をなすと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。